

しえない歴史を明らかにしようということも事実であり、その意味で著者の意図は叙述の中で十分に果されていると考える。

ともあれ、この著作が今後の条坊制度の研究に対して一つの大きな方向を示したといえよう。著者の今後の発展した研究を望む次第である。

(A5判 本文二四〇頁 付図三葉 昭和四

一年九月 初音書房刊 限定五百部 頒価一、

五〇〇円)

(井上満郎)

赤松俊秀 監修

日本仏教史 中世篇

近時の日本仏教史の研究の大きな傾向として、狭義の仏教史、つまり教義や宗門史からぬぎんで、これを日本歴史の発達の中で位置づけ、日本文化史・思想史の一環として考えてゆこうとする立場がさかになりつつあるように見うけられるが、たがいま刊行されつつある『日本仏教史』全三卷(家永三郎監修古代篇、赤松俊秀監修中世篇、圭室諦成監修近世近代篇)は、叙述の重点は、仏教そのものの歴史であるより

は、我国特有の仏教が生みだされ、そして受容されてきた歴史、我国社会の発展と仏教とのかわり方が、より中心にすえられている。われわれは、すでにそうした仏教史の古典として辻善之助博士の『日本仏教史』全十五巻をもっているが、本書は辻博士のち顕著な発展をみせた歴史学の成果をふまえて書かれた概説である。以下赤松教授はじめ北西弘・石田善人・今枝愛真・藤井学・黒田俊雄諸氏によって分担執筆されている中世篇について紹介しよう。

さて、仏教史の中世は、政治史上の中世、すなわち鎌倉・室町・戦国時代と一致してとらえられる。この時代は、混乱と反逆に終始したかにみえながら、武力支配が完成し、農民の自立が顕著となり、また、商工業の活動が活発となった、激動の、そして多くの多い時代であったが、中世仏教はこの「政治・経済・社会のそれぞれの発展に即応して展開した面が顕著であり、その対応のしかたが特に活発で」、「中世仏教のあり方が日本仏教のそれを代表する」ととらえられる。そうした中世仏教は、一つは法然の専修念仏において、一つは榮西の禅宗において成立した。専修念仏成立の意義は、

その浄土観念よりも、貧窮困乏・愚鈍下智・少聞少見・破戒無戒の俗世間の衆庶の救済を仏の本願としたことにあり、平安末―鎌倉初期の荘園の変化、武家政治の成立という時代にあつて、俗世間の倫理観念の発達がその基盤となった。一方禅宗は、鎌倉時代に再興された律宗とともに、出家仏教が我が国ではじめて確立したものと評価されるが、その背景も「武士・農民・商工業者らのたくましく正しい生存意欲のささえなくしてはあり得ない」とされる。

こうして、専修念仏の在家仏教、律律の出家仏教ともに、その対応はあい対立しながらともに仏教者が時代の苦悩を体得することによって成立した中世仏教は、法然門下の分流、親鸞、一遍と時宗、鎌倉禅の勃興、五山派の展開、道元・宗峰・関山の門流、日蓮と法華教団、旧仏教の中世的展開、と展開して叙述され、最後第六章に中世社会と仏教の一章をたて、荘園制社会と仏教、一向一揆、法華一揆、篤信の諸相、中世仏教と文芸・美術に項を分けて概観されている。このうち荘園制社会と仏教、では、呪術と多神観にいろどられた荘園制社会の宗教観が、村落共同体が成長し村堂と講が出

現する中でどのように仏教と接触してゆくか、在地領主の氏寺の問題、荘園領主の荘園支配に仏教倫理がどうかみあうか、荘園体制下の都市の各階層と仏教とのかわり方、さらに聖や融通念仏など中世特有の隠遁遊行の背景などが述べられている。惜しむらくは何れも問題の指摘にとどまる簡略な記述であるが、本書のもっともユニークな部分をなすものであろう。また篤信の諸相、では、熊谷直実・阿仏房・証阿弥陀仏・足利直義・赤尾道宗と各宗、各派がからえらばれた五人がとりあげられている。

以上、甚だ少聞少見の紹介にて汗顔のいたりであるが、本書は、はじめに述べた通り、戦後の新しい仏教史の成果をふまえた学界待望の仏教史概説というべきであろう。ただ難点をあげれば、分担執筆者に、「中世」の認識の微妙なずれがみられること、学界の問題点をなまの形で提出するよりは各執筆者によって巧みに消化されすぎていることに気付く。参考文献や資料のあげ方が十分でないこととともに、初学者には必ずしも親切な概説とはいえないが、それらはむしろ本書の価値をそこなうほどのものではない。本書によって、仏教史の大きな問

題があらためて見定められることであろう。

〔古代篇〕〔家永三郎監修〕A5判三五六頁・文獻・索引一八頁 昭和四二年一月刊 定価一、八〇〇円 中世篇 五二六頁 文獻・索引三〇頁 昭和四二年五月刊 定価二、八〇〇円 近世近代篇〔圭室諒成監修〕近刊 法藏館発行
(熱田 公)

藤井 駿
水野恭一郎 編著
谷口 澄夫

池田光政日記

岡山藩池田家旧蔵の古文書・記録類が岡山大学附属図書館に譲渡されて十七年、藩政の研究も大いに進んだが、そのいわば研究の中心であり文書の番人ともいふべき位置におられた三氏の手によって、藩主新太郎光政の日記が池田家所蔵の自筆本により公刊に附された。近世初頭の大名で自筆日記をのこしたものは極めて稀である上、その時期が寛永十四年から寛文九年におよぶ幕藩体制の確立期にあたり、「儒教的合理主義者」光政が独自の理念をもって藩政を

樹立しようとした時代であるから、編著者ならずとも「江戸時代初期の政治・経済・文化を理解する上に大いに役立つであろうと確信」される。われわれにとってよろこばしいのは、これが最も人を得たかたちで刊行されたことであろう。

内容は藩政の万般にわたっており、幕府当局との関係や、一門・親類・近隣諸藩との交渉、江戸参勤、年中諸行事から家臣団の統制、領内統治にいたるまで、読む者をしてあかせないが、なかでもこの日記の魅力は、それら諸事項にたいする光政の意見が明確に浮き出されていて、そこから彼の個性が強烈に匂ってくる点にある。光政の言行録としては『有斐録』などがあり、刊本にもなっていたが、いずれも後代の編纂にかかると正鵠を欠くうらみもあると思われた。伝聞など第三者の介在をゆるさぬ自筆日記は、この点でも一級の史料を提供しているわけである。寛永十九年から万治二年までの十八年間に家臣や領民に与えた教諭については、光政自身がとくに主なものを書いており、本書はこれを別巻としておさめている(したがってこの分は重複するものがある)。附録の池田光政自歴覚